

氏 名 鄭 光峰 (テイ コウホウ) Zheng Guangfeng

所 属 言語教育研究科 日本語教育学専攻
Graduate School of Language Education

学位の分野 言語教育学

学位授与日 平成25年7月22日

学位授与の条件 学位規程第18条

学位論文題目 イメージ図式による授受動詞の指導法
— 与え動詞「あげる・くれる」を中心に —

The method to teach “give” and “receive” verb
through image diagram

— Methods of Teaching Juju Verbs with the Aid of Cognitive Maps:
Paying Special Attention to Ageru and Kureru —

論文審査委員 主 査 石川 守 (拓殖大学 教授)
副 査 遠藤 裕子 (拓殖大学 教授)
阿久津 智 (拓殖大学 教授)

平成25年6月24日

学位（博士・言語教育学）申請論文 審査報告書

〈学位申請者〉 氏名 鄭 光峰 学生番号 9D502

〈論文題名〉 イメージ図式による授受動詞の指導法
— 与え動詞「あげる・くれる」を中心に —

審査委員

主査	外国語学部教授	石川 守
副査	外国語学部教授	遠藤 裕子
副査	外国語学部教授	阿久津 智

I. 論文の主旨

日本語教育において指導が難しいとされる指導要素の一つに授受動詞「あげる」「くれる」「もらう」があげられる。本研究は、この授受動詞について様々な先行研究や調査、他言語との対照研究を通して分析し、その指導上の困難さの原因を明らかにした。更に、その結果を基に、従来の指導法の問題点を明確にし、学習者に理解しやすい効果的な指導法を考案し、教師と学習者に資することを目的としている。

II. 論文の構成

本論文の構成は、次の通りである。

目次

- 0. 1 研究目的
- 0. 2 研究方法
- 0. 3 本論文の構成

- 第1章 日本語の授受表現
 - 1. 1 物の授受を表す「あげる」「くれる」「もらう」
 - 1. 1. 1 「主語の立て方＋授受の方向性」による分類
 - 1. 1. 2 「話し手の視点＋主語の立て方」による分類
 - 1. 1. 3 「話し手の視点＋授受の方向性」による分類
 - 1. 1. 4 「ウチ・ソトの概念」による分類
 - 1. 1. 5 「恩恵性」による物の授受
 - 1. 2 行為の授受を表す「～てあげる」「～てくれる」「～てもらう」
 - 1. 2. 1 「恩恵」による行為の授受
 - 1. 2. 2 「非恩恵」による行為の授受
 - 1. 3 敬意の授受を表す「さしあげる」「くださる」「いただく」
 - 1. 3. 1 「上下関係」による分類
 - 1. 3. 2 「内外関係」による分類
 - 1. 4 まとめ

- 第2章 日中両語の授受表現
 - 2. 1 日中両語の授受本動詞
 - 2. 1. 1 日中両語の与え本動詞
 - 2. 1. 2 日中両語の受け本動詞
 - 2. 1. 3 日本語授受本動詞の恩恵性及び、それに対応する中国語
 - 2. 2 日中両語の授受補助動詞
 - 2. 2. 1 日中両語の与え補助動詞
 - 2. 2. 2 日中両語の受け補助動詞
 - 2. 2. 3 日本語授受補助動詞の非恩恵性及び、それに対応する中国語
 - 2. 3 まとめ

- 第3章 世界中の授受表現
 - 3. 1 日本国内の授受動詞
 - 3. 1. 1 現代日本標準語
 - 3. 1. 2 日本語方言
 - 3. 2 外国語の授受動詞
 - 3. 2. 1 中国語
 - 3. 2. 2 朝鮮語・韓国語
 - 3. 2. 3 インドネシア語・マレー語
 - 3. 2. 4 英語
 - 3. 2. 5 ベトナム語
 - 3. 2. 6 フィリピン語
 - 3. 2. 7 スペイン語
 - 3. 2. 8 ミャンマー語
 - 3. 2. 9 トルコ語
 - 3.3 まとめ

第4章 日本語の授受表現の従来の指導法

4.1 授受動詞の提出順序

4.1.1 日本語教材における授受動詞の提出順序

4.1.2 日本語教師用指導・参考書及び論文などにおける授受動詞の提出順序

4.2 授受動詞の従来への指導法

4.2.1 人称制限による授受動詞の指導

4.2.2 実際の授受行為による授受動詞の指導

4.3 日本語の授受動詞における習得研究

4.3.1 口頭データによる習得状況

4.3.2 作文データによる習得状況

4.3.3 空欄補充形式テストによる習得状況

4.3.4 絵を使用した文産出テストによる習得状況

4.4 まとめ

第5章 日本語の授受表現の新たな指導法

5.1 新たな指導法における提出順序

5.2 新たな指導法における導入

5.2.1 「あげる」と「もらう」の関係・その基本図式

5.2.2 「もらう」と「くれる」の関係・その基本図式

5.3 「あげる」と「くれる」との使い分け・その図式

5.3.1 認知学習理論による「あげる」と「くれる」との関係

5.3.2 人と人とのやり取り・その図式

5.3.3 会社と会社とのやり取り・その図式

5.3.4 国と国とのやり取り・その図式

5.4 まとめ

第6章 調査・考察

6.1 調査目的

6.2 調査協力者

6.3 調査実施の方法

6.4 調査結果の考察と分析

6.5 まとめ

終章 おわりに

7.1 まとめ

7.2 今後の課題

参考文献

調査資料1

調査資料2

III. 本論文の概要

研究目的

日本語学習者にとって、習得の難しい学習項目の1つに、いわゆる「日本語の授受表現」があげられる。その理由として考えられるのは、「日本語の授受表現」に用いられる授受動詞が他の言語では、一般的には与え動詞と受け動詞の2項体系しか持っていないのに対して、日本語の与え動詞には「あげる」・「くれる」の二つがあり、受け動詞には「もらう」があり、3項体系という特異性を持っていることである。更にこの与え動詞が、受け手と話者の関係により、様々に変化してくるといふ複雑な構造を持っている。そのため、授受動詞は、初級での指導要素であるにもかかわらず、従来、日本語教育で最も指導の困難なものの一つに数えられている。筆者は、この問題を解決するために本研究を行っている。

研究方法

本論文では、授受動詞に関する多くの論文等を綿密に調査分析し、また、日本語標準語の授受動詞を方言から位置づけ、日本語学習者の多い外国語を中心に直接その母語話者に会い、調査を行っている。そのことから日本語授受動詞の特殊性を明確にしている。この特殊性から、指導上の困難点を分析し、それを明確にしている。この指導上の困難点を克服するために、新たに認知心理学の心的マップというアイデアを応用し、従来の教室内での実物を使ったやりとりといういわば原始的な指導法から、授受動詞の基本図式を理解させ、次の段階で自己と他者よりも大きな「ウチ・ソト」を図式で理解させ、更に大きな関係へと拡大していくことによって、その相対性を総合的に理解し、練習できるようにさせる内的な（認知的な）情報処理過程をビジュアルな図式で示す指導法を開発し、実際にこの指導法で授業を行い、調査を行っている。

研究内容

第1章においては、主に日本語学における授受動詞の先行研究を綿密に分析し、日本語の授受動詞の基本的な意味・用法、及び、その特徴を整理することによって、日本語の授受動詞が与え動詞に関して「あげる」「くれる」という二つに分かれ、更に受け動詞との3項体系を構成していることを明らかにしている。しかも、この二つに分かれた与え動詞が人称によってではなく、話者と与え手との「ウチ」と「ソト」という高次元な社会的・文化的概念を背景に状況に応じて様々に変化する複雑な構造を持つていることを指摘している。つまり、日本語の授受動詞は、話し手が談話の流れの中で誰に視点を置くかという「話し手の視点」はもちろん、話し手との心理的な距離を表す「ウチとソトの概念」、目上とか同等とか目下とかいう「ウエシタの概念」、与え手の行為が受け手にとって、恩恵・利益を表しているか否かという「恩恵・非恩恵の概念」という様々な要素が深く関わっていることが明らかにしている。

第2章においては、日本語の授受動詞と中国語の授受動詞の共通点、相違点を明らかにするため、日本語の授受本動詞「あげる（やる）」「くれる」「もらう」「さしあげる」「くださる」「いただく」とそれに対応する中国語の授受表現、及び日本語の授受補助動詞「～てあげる（やる）」「～てくれる」「～てもらう」「～てさしあげる」「～てくださる」「～ていただく」とそれに対応する中国語の授受表現を、それぞれ「話し手の視点」に加え、「内外関係」「上下関係」「恩恵関係」という観点から分析している。その結果、中国語の授受動詞は、3項体系である日本語の授受動詞と異なり、2項体系であり、「ウチ・ソト」、「ウエ・シタ」、「恩恵・非恩恵」による方向性などはなく、与え手と受け手との間に、物及び行為の授受関係が生ずるかいないかを表すにすぎず、事実を中立的・客観的に表現するのが一般的であるということを示している。

第3章においては、更に、中国語以外に、学習者の多い言語を中心に筆者が直接会って調査が可能であった朝鮮語・韓国語、インドネシア語、英語、ベトナム語、フィリピン語、スペイン語、ミャンマー語、トルコ語と日本語の授受動詞を比較している。その結果、日本語と他言語との相違点を分析し、これらの言語が日本語の3項体系とは異なり全て2項体系であることを明らかにしている。更に、文献から、タイ語（田中1997）、レト・ロマンス語、カザフ語、ヒンディ語、モンゴル語、ネパール語（山田2004）、アラビア語（Ahmed2006）、シンハラ語（Priyadarshani・浮田2008）なども全て2項体系であり、3項体系を持つ言語は調査した範囲では日本語以外には見当たらず、与え動詞が一つであるという特徴をもつということを示している。

これら2項体系の言語においては、与え手と受け手という常に一定した客観的な関係だけで語の選択が決まってくる。しかし、日本語の授受動詞の場合には、与え手と受け手以外に、話し手が主要な要素として加わっており、話し手から見た与え手と受け手との「ウチ・ソト」の関係が欠かせない要素となっている。しかし、外国語の授受動詞の場合には、このような「ウチ・ソト」の区別がないことが大きな相違点であるとしている。また、日本国内で使われている方言も調べているが、同じ与え動詞である「やる」と「くれる」の対立は、日本国内のどこにでも普遍的に存在するわけではなく、「やる」と「くれる」の区別がない方言も少なからず存在

していることについても述べている。

第4章においては、日本語教育の現場において授受動詞が、どのように扱われているのか、いくつかの代表的な日本語教材と調査の対象となった拓殖大学留学生別科で使用されている教材、及び、日本語教師用指導書や参考書、指導法に関する論文などを取り上げ、「授受動詞の提出順序」、「従来の授受動詞の指導」という2つの点から分析している。更に日本語学習者による授受動詞の習得研究を「口頭データ」、「作文データ」、「空欄補充形式テスト」、「絵を使用した文産出テスト」という4種類のデータ収集方法別に概観し、最後に、これまでの授受動詞の指導法の妥当性を検証している。その結果、授受動詞の提出順序としては、「あげる>もらう>くれる」の順が一般的であり、授受動詞の指導には、「あげる」、「もらう」、「くれる」のうち、特に「あげる」と「くれる」の選択は、客観的な「人称」という概念では不十分であり、話し手から見た「ウチ・ソト」という概念によって規定されるため、「ウチ・ソト」による指導が不可欠であることを指摘している。更に、習得順序としては、話し手の視点と文の主語が一致する「あげる」、「もらう」、文の主語が与え手で、話し手の視点が受け手であるという複雑な構造を持つ「くれる」より習得されやすく、また、それが授受動詞の習得に影響を及ぼしている要因としては「視点の置き方」が最も大きいということも指摘している。

第5章においては、与え動詞「あげる」、「くれる」の選択は、与え手と受け手との人称の関係によって一定に決定されるのではなく、話し手から見たウチ・ソトの関係という話し手にとっての内的な心的マップ・認知マップによってなされていることを指摘している。つまり、個々の人称による事例を記憶するのではなく、話し手から見たウチ・ソトという話し手の心的マップ・認知マップに基づき、個々の事例を導き出すのでなければ、決して習得には至らないということを指摘している。したがって、指導法として人称に基づいた個々の事象を示すだけではなく、話し手から見たウチ・ソトの関係という心的マップ、或いは認知マップのようなものを学習者の頭の中に形成し、それに基づいた認知的な指導法を行っていかねばならないとしている。そして、新たな指導法として従来の教室内で実物を用いた具体的なやりとりの動作だけではなく、心的マップ・認知マップのようなイメージ図式、即ち線や図形による「図解法」により、まず、「あげる」「くれる」の区分の基礎となっている自己と他者との関係を基本図式によって「あげる」「くれる」を理解させ、次の段階で自己と他者よりも大きな「ウチ・ソト」の関係を図式で理解させ、更に、大きな関係へと拡大していくことによって、学習者が自ら心的マップ・認知マップのようなイメージマップによる「あげる」と「くれる」の使い分けの規則が理解できるような独創性のある斬新な指導法を考案し、提示している。

その図式と指導法の詳細を参考として以下に示す。

基本的な「あげる」「くれる」「もらう」の図式

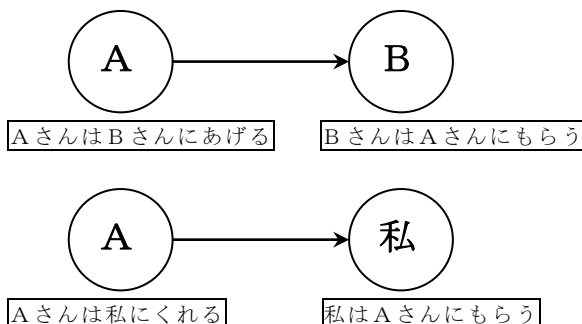
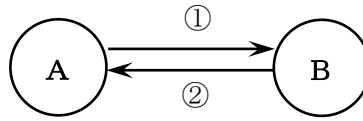


図13

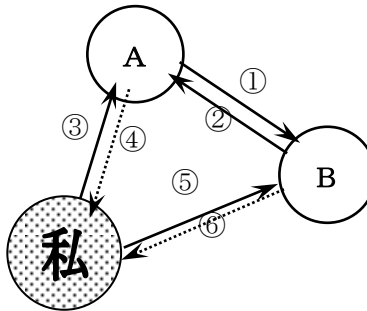
図
15



- ① AさんはBさんにXをあげる
- ② BさんはAさんにXをあげる

* 図15はAさんとBさんがやり取りをする場面である。AさんがBさんにXを与える時(①)にもBさんがAさんにXを与える時(②)にも同じく「あげる」が用いられ、この場合は、話し手の視点がどちら寄りでもなく中立である。

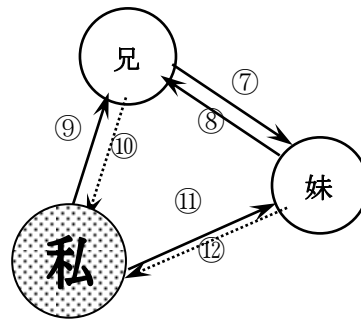
図
16



- ③ 私はAさんにXをあげる
- ④ Aさんは私にXをくれる
- ⑤ 私はBさんにXをあげる
- ⑥ Bさんは私にXをくれる

* 図16は私とAさん、私とBさんがやり取りをする場面である。私がAさん、BさんにXを与える時(③・⑤)には「あげる」、Aさん、Bさんが私にXを与える時(④・⑥)には「くれる」が用いられ、この場合、AさんもBさんも私にとって「ソト」の人である。

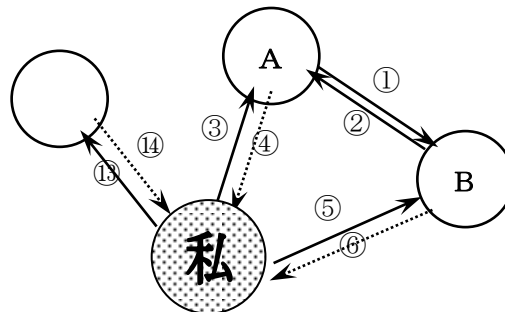
図
17



- ⑦ 兄は妹にXをあげる ⑧ 妹は兄にXをあげる
⑨ 私は兄にXをあげる ⑩ 兄は私にXをくれる
⑪ 私は妹にXをあげる ⑫ 妹は私にXをくれる

* 図 17 は兄と妹、私と兄、私と妹がやり取りをする場面である。兄と妹とのやり取りでは、兄が妹にXを与える時(⑦)にも、妹が兄にXを与える時(⑧)にも、「あげる」が用いられ、この場合、図 15 と同様、話し手である私の視点がどちら寄りでもなく、中立である。一方、私と兄、私と妹とのやり取りでは、私が兄、妹にXを与える時(⑨・⑪)には「あげる」、兄、妹が私にXを与える時(⑩・⑫)には「くれる」が用いられ、この場合、兄、妹は私の家族にも関わらず、図 16 と同様、兄も妹も私にとって「ソト」の人である。

図
18

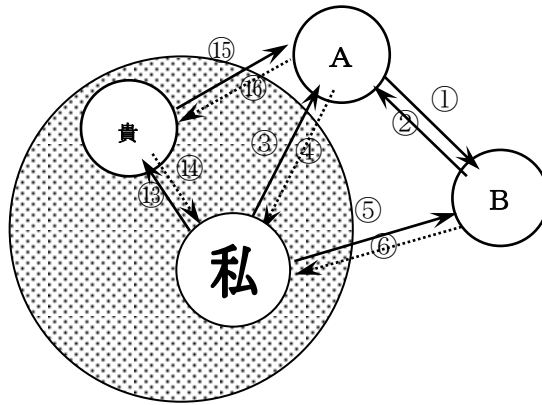


- ⑬ 私はあなたにXをあげる
⑭ あなたは私にXをくれる

* 図 18 は私とあなたがやり取りをする場面である。私があなたにXを与える時(⑬)には「あげる」、あなたが私にXを与える時(⑭)には「くれる」が用いられ、あなたは私にとって「ソト」の人である。

図

19



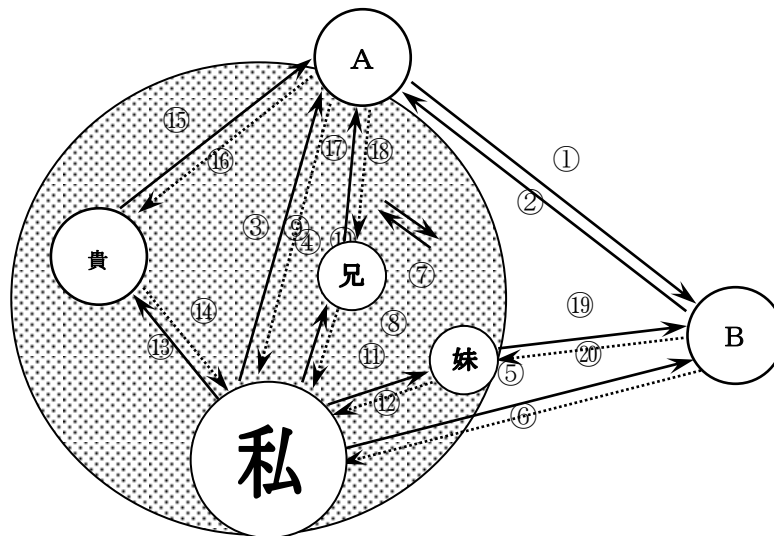
⑮ あなたはAさんにXをあげる

⑯ AさんはあなたにXをくれる

* 図 19 はあなたとAさんがやり取りをする場面である。あなたがAさんにXを与える時 (⑮) には「あげる」、AさんがあなたにXを与える時 (⑯) には「くれる」が用いられ、日本語では、会話の相手には原則として共感を持っているため (牧野 1996 : 73)、話し手である私にとって、あなたは「ウチ」の人となり、Aさんは「ソト」となる。あなたとBさんのやり取りも同様である。

図

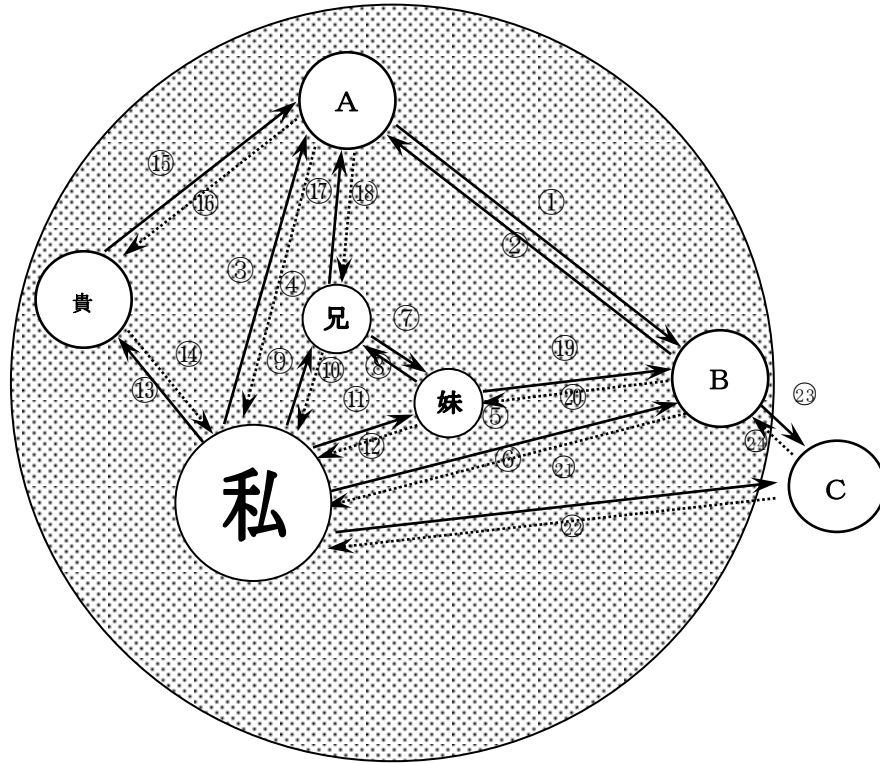
20



⑰ 兄はAさんにXをあげる ⑱ Aさんは兄にXをくれる

⑲ 妹はBさんにXをあげる ⑳ Bさんは妹にXをくれる

* 図 20 は兄とAさん、妹とBさんがやり取りをする場面である。兄がAさんにXを与える時 (⑰) と妹がBさんにXを与える時 (⑲) には「あげる」、Aさんが兄にXを与える時 (⑱) とBさんが妹にXを与える時 (⑳) には「くれる」が用いられ、この場合、兄と妹は私の家族、つまり私のグループの人間であるため、話し手である私にとって、兄と妹は「ウチ」の人となり、AさんとBさんは「ソト」の人となる。

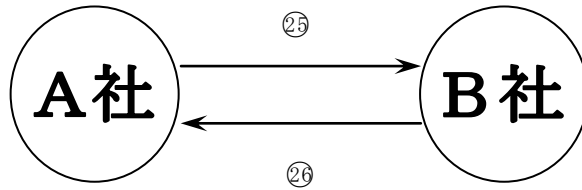


- ①私はCさんにXをあげる ②Cさんは私にXをくれる
 ③BさんはCさんにXをあげる ④CさんはBさんにXをくれる

* 図 21 は私とCさん、BさんとCさんがやり取りをする場面である。私とCさんのやり取りでは、私がCさんにXを与える時(①)には「あげる」、Cさんが私にXを与える時(②)には「くれる」が用いられ、この場合、私にとって、Cさんは「ソト」の人である。一方、BさんとCさんのやり取りでは、BさんがCさんにXを与える時(③)には「あげる」、CさんがBさんにXを与える時(④)には「くれる」が用いられ、この場合、Bさんは私の友達で、Cさんは初対面の人であるため、話し手である私にとって、Bさんは「ウチ」の人となり、Cさんは「ソト」の人となる。AさんとCさんのやり取りも同様である。

5. 3. 3 会社と会社とのやり取り・その図式

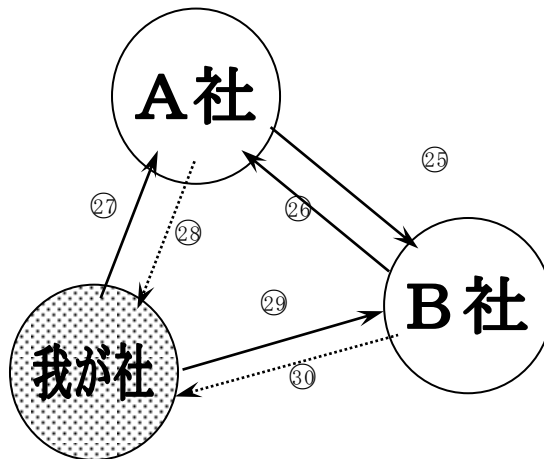
図
22



- ②5 A社はB社にXをあげる
- ②6 B社はA社にXをあげる

* 図 22 はA社とB社がやり取りをする場面である。A社がB社にXを与える時（②5）にもB社がA社にXを与える時（②6）にも同じく「あげる」が用いられ、この場合は、図 15 の人と人とのやり取りと同様、話し手の視点がどちら寄りでもなく中立である。


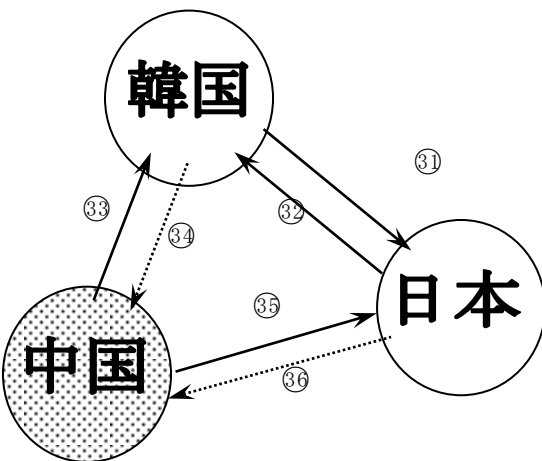
図
23



- ②7 我が社はA社にXをあげる
- ②8 A社は我が社にXをくれる
- ②9 我が社はB社にXをあげる
- ③0 B社は我が社にXをくれる

* 図 23 は我が社とA社、我が社とB社がやり取りをする場面である。我が社がA社、B社にXを与える時（②7・②9）には「あげる」、A社、B社が我が社にXを与える時（②8・③0）には「くれる」が用いられ、この場合、話し手である私は我が社の一員であるため、我が社は「ウチ」の対象となり、A社、B社は「ソト」の対象となる。

5. 3. 4 国と国とのやり取り・その図式

<p>図 24</p>	 <p>㉑ 韓国は日本にXをあげる ㉒ 日本は韓国にXをあげる</p> <p>* 図 24 は韓国と日本がやり取りをする場面である（学習者は中国人の場合）。韓国が日本にXを与える時（㉑）にも日本が韓国にXを与える時（㉒）にも同じく「あげる」が用いられ、この場合は、図 15 の人と人とのやり取り、図 22 の会社と会社とのやり取りと同様、話し手の視点がどちら寄りでもなく中立である。</p>
<p>図 25</p>	 <p>㉓ 中国は韓国にXをあげる ㉔ 韓国は中国にXをくれる ㉕ 中国は日本にXをあげる ㉖ 日本は中国にXをくれる</p> <p>* 図 25 は中国と韓国、中国と日本がやり取りをする場面である。中国が韓国、日本にXを与える時（㉓・㉕）には「あげる」、韓国、日本が中国にXを与える時（㉔・㉖）には「くれる」が用いられ、この場合、話し手である私は中国の一員であるため、中国は「ウチ」の対象となり、韓国、日本は「ソト」の対象となる。</p>

以上のように他に類を見ない図式を用いた斬新な指導法を考案している。

第6章においては、第5章の新たに開発した指導法を用いて、初級日本語学習者を対象にして復習の形（彼らは既に勉強していたため）で実際に授業を行い、授業前にはどのように認識していたのか、授業後にはどのように認識するようになったのかについてこの方法を受講者に評価してもらう形で調査を行い、その結果、高評価を得ている。

今後の課題として、まず、英語、スペイン語、ベトナム語などの受け動詞は、主語寄りの視点が好まれるため、使用制限を受けていることが分かったが、この点について更なる調査が必要ではないかと述べている。
次に、新たな授受動詞の指導法を用いて、既習の初級日本語学習者を対象に復習の形で実際に授業を行い、調査を行っているが、既習の初級日本語学習者のみならず、中・上級日本語学習者を対象にした調査や日本語の授受動詞を未習の日本語学習者を対象にした調査など、更なる調査や分析が必要であることを認めている。
また、日本語の授受動詞には、単に物の授受を表す動詞のみならず、恩恵の授受を表す補助動詞も、敬意の授受を表す敬語動詞の用法を調査、分析し、それらの指導法についても検討する必要があるとしている。

IV. 論文の総合評価

論文提出までの経緯

筆者は、2009年4月本学言語教育研究科博士後期課程言語教育学専攻に入学し、修了必要単位10単位はすでに取得済みであり、外国語検定試験にも合格している。

本論文は、言語教育研究科博士論文申請規定A日程により進められている。
2010年4月22日に、学位論文提出許可願いが出され、2010年5月28日、言語教育研究科委員会で承認されている。論文提出時の業績は、中間発表および『拓殖大学言語教育研究』で、計5本となる。完成論文発表会は、2013年1月12日に実施され、論文は2013年3月29日に受理されている。審査委員による論文審査は、2013年6月7日に行われ、判定の結果は全員一致で合格であった。最終試験（口述試験）は、2013年6月24日に実施し、審議の結果「合格」と判定した。

審査所見

1) 研究方法に関して

日本語教育で指導困難といわれる日本語授受動詞の問題点について先行研究を綿密に分析し、そのやり方を受け継ぐと同時に、それを通し問題点を明らかにした。また、各国語の授受動詞の実態を丹念に調査し、日本語の授受動詞との対照研究を行い、日本語の3項体系という特殊性を明らかにし、それらをふまえて指導上の困難点の原因を明らかにした。更に、認知心理学の心的マップというアイデアを応用し、斬新な図式による指導法を考案した。更に、学習者に対しその指導法を実施して、その感想を調査している。これらの点は順当な研究方法として評価できる。

2) 内容と独創性の評価に関して

日本語の授受動詞の指導は、最も基本的な動詞の一つであるにもかかわらず、他に類を見ない日本語相対敬語の用法に通じる「ウチ」と「ソト」という高度な社会的、文化的な概念を背景に持っている。この授受動詞が持つ問題点を、綿密な先行

研究の調査と分析、更に日本語方言における標準語の授受動詞の位置づけ、また、日本語学習者の多い言語を中心に、それらを母語とする日本語学習者に直接調査を行い、日本語授受動詞の特殊性を明らかにしている。その結果、日本語授受動詞が世界に類を見ない「ウチ」と「ソト」という社会的・文化的概念を背景とした特殊な3項体系を持った動詞であるということを明確にし、同時に指導上の困難点の原因を明らかにしたことは評価できる。更に、従来 of 指導法を詳細に分析し、その問題点を明らかにしている。この問題点に対して、認知心理学における心的マップというアイデアから図式による独創的な指導法を考案し、実施したことは、大いに評価できる。

3) 今後の課題として

今回の研究は本動詞中心であったが、授受動詞には、補助動詞としての用法もあり、今後それを明らかにすることが望まれる。また、英語、スペイン語、ベトナム語などの受け動詞が主語寄りの視点が好まれるため、受け動詞が使用制限を受けるということが分かったが、この点について更なる調査が必要ではないかと思われる。更に、日本語の与え動詞は他と異なり、「あげる」「くれる」の二つに分かれ、その用法は「ウチ」と「ソト」という高度な社会的、文化的概念を背景としているため、その用法は他の言語に比べ極めて複雑なものであるということがわかった。しかし、それに対して受け動詞は、日本語の場合、「もらう」一つであるが、他の言語の場合、逆に複雑であることがわかった。特にその受け動詞の用法に関し、筆者の母語である朝鮮語と中国語では、どのような使い分けになっているのか明らかにすることを期待したい。

次に、指導法であるが、今回、初級日本語学習者を対象に復習の形で実際に授業を行い、調査を行ったが、中・上級日本語学習者などを対象にした調査や日本語の授受動詞を未習の日本語学習者を対象にした調査など、さらなる調査や分析が必要ではないかと思う。

4) その他

学位申請者は、日本語授受動詞に関する綿密な先行研究を行い、方言や他の言語も調査し、日本語標準語における授受動詞の特異性を明確にした。また、認知心理学の知見を応用し斬新な図式による指導の考案したことは大いに評価に値する。また、指導教授として数年間にわたり指導を行ってきたが、その間、日本語の誤りを訂正したことは一度もないという、その日本語能力に関しては、特筆すべきものがある。今後このような優れた能力を生かし、言語教育の研究者として、また教育実践者として日中の架け橋となって、大いに活躍することを本審査委員会は期待するものである。

審査委員会結論

以上述べたことから、本審査委員会は、慎重・厳正な審査の結果、総合的に判断し、三委員全員が一致して学位申請者に対し、「博士（言語教育学）」の学位を授与するに値するものと認めた。

以上